



隊長 白瀬 轟 (49) 秋田県

学術部長
武田 輝太郎 (33)
福岡県

衛生部長
三井所 清造 (34)
福岡県

書記長
多田 恵一 (28)
岡山県

糧食係
西川 源蔵 (24)
鳥取県

学術部員
池田 政吉 (44)
東京都

炊事係
三浦 幸太郎 (25)
宮城県

被服係
吉野 義忠 (23)
香川県

橇犬係
山辺 安之助 (44)
樺太

橇犬係
花守 信吉 (33)
樺太

写真部員
田泉 保直 (23)
東京都

白瀬轟生誕160年・大和雪原到達110周年記念企画展

白瀬轟を支えた南極探検隊



一等運転士
丹野 善作 (41)
宮城県

機関長
清水 光太郎 (40)
愛知県

二等運転士
土屋 友治 (34)
山形県

三等運転士
酒井 兵太郎 (44)
愛知県

事務長
島 義武 (30)
福島県

船長 野村 直吉 (49) 石川県

機関士
村松 進 (26)
山梨県

水夫長
井上(高川) 歳次郎 (31)
三重県

舵取
佐藤 市松 (33)
福島県

料理人
渡辺 近三郎 (29)
岐阜県

舵取
渡辺 鬼太郎 (29)
愛媛県

木工
安田 伊三郎 (32)
静岡県

油差
笹崎(藤平) 量平 (27)
千葉県

火夫
杉崎 六五郎 (36)
神奈川県

火夫
高取 寿美松 (35)
東京都

水夫
柴田 兼治郎 (20)
愛知県

水夫
福島 吉治 (19)
千葉県

見習運転士
三宅 幸彦 (27)
和歌山県

舵取
釜田 儀作 (27)
石川県

火夫
浜崎 三男作 (27)
大分県

展示
期間

令和3年11月9日(火) ▶ 令和4年3月13日(日)

秋田県にかほ市教育委員会
白瀬南極探検隊記念館

ごあいさつ

令和2年度は、白瀬南極探検隊記念館が開館して30周年を迎えました。これもひとえに、展示・所蔵資料や様々な情報提供にご支援、ご協力を賜りました白瀬南極探検隊員御親族・関係者の皆様のおかげと感謝申し上げます。

さて、一世紀以上前の白瀬南極探検隊の功績に思いをはせる時、私は、彼らの人間的なスケールを考えずにはおれません。…この場合の「スケール」とは、彼らが心に持っていた「尺」或いは「ものさし」のことです。

私ども、現代に生きる市民が日々ミリの単位のことにあくせくしている態度に比べ、特に白瀬蘆は、比較にならないほど大きなスケールで物事を考え実行した人だったのではないかと推察されます。知識も情報も乏しい最果て・南極を目指し、人跡未踏の大和雪原(やまとゆきはら)に到達し無事に帰国、南極の領土獲得を企てつつ億単位の借財を完済し85年の生涯を全うする、こうした超弩(ど)級の人生を送ることが私たちにできるでしょうか。

それは、探検隊員についても同様です。今となっては、公式記録「南極記」をはじめ隊員個々の記録から察するより術はありませんが、白瀬南極探検隊は大きなスケールを持つ人間たちの奇跡的な結集と思わざるを得ません。こうした人間を生み育んだのは、国の形の未だ定まらぬ明治という時代環境のみならず、隊員個々の血に潜む才であり智でありスケールだったのでしょう。

当館としては、白瀬蘆はもとより、110年前に大和雪原到達の偉業を成し遂げた「奇跡の結集」を果たした隊員個々に光を当てることは、即ち探検の意義の再評価につながるものと考えております。

このたび、NPO法人白瀬南極探検100周年記念会に委託して行われた「白瀬南極探検隊親族調査」が、新型コロナ禍の制約の中、限られた時間のなかで大きな成果を上げられたことに敬意を表しますとともに、調査にご協力いただいた探検隊並びに後援会等の親族・関係者の皆様に改めて深甚なる感謝を申し上げます。

今回の調査報告を足掛かりに、白瀬南極探検隊員たちの実像がさらに明確化され、社会の課題を解決するための大きなスケールが提示されることを期待しております。

白瀬南極探検隊記念館 館長

「白瀬南極探検」の概要

白瀬臺を隊長とした白瀬南極探検隊は、明治43年(1910)11月29日に東京・芝浦を出航、途中、明治44年(1911)2月にニュージーランドのウエリントン港で水や食料を補給、南極に挑みますが出発が遅れ、南極の冬が近づいていたため、同年3月14日、シドニーで南極の夏を待つため引き返す決断をしています。

シドニーでは5月から約6か月滞在し、ようやく11月19日南極に出発。明治45年(1912)1月16日に南極クジラ湾に到着、内陸に向かう白瀬以下の5名の突進隊は、同年1月28日に

南緯80度05分西経156度37分まで到達しました。到着地点には、日章旗を立て、その下に探検事業に寄付した方々の名簿を入れた銅函を埋めました。見渡す限りの一帯を「大和雪原」と命名し、領有の宣言をしています。

一方、開南丸は同年1月24日エドワード7世ランドに着岸し、調査のために探索隊が上陸、アレキサンドラ山脈に登り、記録標を建立しています。26日には南緯76度06分西経151度20分まで到達しました。

「白瀬南極探検」の組織

白瀬南極探検隊は、探検事業を実施する「隊員」と木造機帆船「開南丸」を操舵する「船員」とに分かれます。隊員を指揮するのは、白瀬臺隊長、船員を指揮するのは、野村直吉船長でした。

ちなみに、南極探検事業の最高機関は、大隈重信を会長とする南極探検後援会でした。後援会は国民からの寄付や資金の管理・対外交渉・白瀬南極探検隊から上がる計画案や予算執

行案などの案件を幹事に諮った上で決定しており、探検事業すべての事案に決定を下す団体でした。

白瀬南極探検隊は、結果として隊員・船員総勢31名とカラフト犬延べ60頭からなりました。オーストラリアのシドニーで隊員や船員が入れ替わり、航海途中で死亡したカラフト犬が追加され、南極を目指しました。



南極探検25周年開南丸抜錨記念碑

昭和11年(1936)、「南極探検二十五周年記念会(会長:大隈信常)」が南極探検25周年を記念し、南極探検船「開南丸」が出航した場所に建立。現在は東京都港区「埠頭公園」(港区海岸三丁目14-39)になっている。石碑の右下には南極探検の参加者全員の名簿と南極探検後援会の名簿が刻まれている。芝浦ふ頭駅(ゆりかもめ)下車徒歩5分/JR田町駅芝浦口(東口)下車徒歩15分

南極探検の隊員について

白瀬南極探検隊の隊員は、白瀬や野村、大隈など関係者と面識がある人が採用となっていますが、これらの人が隊員採用試験を受けたのかどうかはわかりません。新聞による隊員募集は南極探検事業を国民が知る良い機会だったのかも知れません。

白瀬が隊員に命令したことを記録した『命令録』には、隊員に仮採用、本採用された記録も記されていますが、出航日が近づくにつれ辞職する人が増え、出航日当日に辞めた隊員もいました。とくに学術部では自記寒暖計と自記晴雨計の用紙取り替えや気象観測、日誌の作成などが毎日のようにありましたが、出航当日に学術部員が辞めてしまったため、武田の仕事は忙しいことが日記から読み取れます。写真撮影は学術部の仕事でしたが、病気やケガの対応が主な仕事である衛生

部の三井所をお願いしています。

第1次航海後、三浦幸太郎が下船し、シドニーで南極の夏を待つ間、池田政吉と田泉保直、カラフト犬29頭が追加されました。

南極に到着すると、白瀬隊長を含む5人で内陸に向かう突進隊と突進隊の根拠地で気象観測などを行う、2名の観測隊が編成されました。それ以外の隊員は、開南丸に同乗し、船員とともに海上に浮かぶ氷塊に張り付く鉤物の採取や、エドワード7世ランドのアレクサンドラ山脈への登山、ペンギンやアザラシの活動写真撮影など、さまざまな学術調査を不眠不休で行ったことが野村船長の日記や、『南極記』、多田恵一の著作物からわかっています。

[隊員]



01 隊長
白瀬 蘆

Shirase Nobu

探検時49歳
秋田県由利郡金浦村
(現・にかほ市)
文久元年(1861)生
昭和21年(1946)没

白瀬知道・マキエの長男として生まれ、寺子屋の師匠に北極のことなどを聞き、11歳で探検を志しました。

明治43(1910)年1月、帝国議会に探検費用の請願を提出し、議会には承認されましたが、政府は一円も支給しませんでした。新聞各社による南極探検計画の報道が、明治の市民感情を高揚させました。船の調達や資金集めの労苦によって、予定した出航日には大幅に遅れましたが、同年11月に開南丸は東京芝浦を出航しました。

南極探検の長旅から戻ると、次は借金返済というもっと長い旅に出ることになります。自宅の売却、著書の出版、映画と講演の旅行等で返済し、探検から23年後、昭和10年(1935)頃ようやく莫大な借財は返し終わったといえます。

白瀬は居住地も様々変え、1か所に長くいることはなく、三男が用意してくれた隠居所にも3年いただけでした。終戦後、疎開先の秋田県金浦の郷里から埼玉県新座市の自宅に戻りますが、1年足らずで二女タケコ母子と共に京都を経て愛知県挙母町に行き、ここで亡くなりました。タケコは若い頃、蘆と講演旅行にも同行しました。

愛知県吉良町の西林寺、秋田県にかほ市の浄蓮寺、横浜市の日野公園墓地にもお墓があります。



▲白瀬蘆著『南極探検』

白瀬蘆の著作は大正2年(1913)1月22日に発行されたが、一番早かったのは多田恵一の『南極探検私録』だった。

白瀬南極探検隊記念館蔵



02 学術部長
武田 輝太郎

Takeda Terutaro

探検時33歳
福岡県京都郡城井村
(現・犀川町)
明治12年(1879)生
大正14年(1925)没

武田文造、カツの長男として生まれ、自然科学に興味を持ち、熊本第五高等学校で地質、地文学の教室助手として地質学を5年間学びました。

熊本九州学院を卒業後、明治31年地文科中等教員試験合格。明治32年、福岡県東築中学校(現東築高校)教諭を拝命。京都(みやこ)中学校、熊本中学校赴任後、明治43年白瀬南極探検隊に入隊。日本気象学会員天文気象、動物、植物を研究した経歴があります。

明治43年8月7日、探検隊に学術部員に採用され、東京天文台の一戸博士、中央気象台の中村台長、岡田理学士より極地における天測などの実習の指導を約1ヵ月にわたり受けたといえます。

寒さにより測量機器が誤作動する中、これまでの実践を活かし、天測などによる突進隊の正確な行動を克明に記録し、南極探検学術日誌、学術研究誌や防寒具など白瀬隊の重要な資料を長年保管していました。



◀映写用ガラス乾板32枚
(色付き)

白黒写真の感光した面に色付けをして、ガラス乾板2枚で挟んであり、映写用に製作された特別なガラス乾板。武田輝太郎のご孫の方々が長年大事に保存され、全部で63枚ある。

静岡県藤枝市・武田康宏氏寄託資料
白瀬南極探検隊記念館蔵





03 衛生部長 三井所 清造

Miisho Seizo

探検時34歳
福岡県
明治11年(1878)生
昭和22年(1947)没



福岡県出身東京薬学専門学校卒業剣舞を得意とし、柔道の達人でもあります。多田隊員の眼や、隊員の盲腸炎を手術しました。柔術で鍛錬した体力は、自分の体重より重い荷物をどんどん運ぶのには感心されたといえます。〔「南極記」より〕温厚なタイプで真摯で几帳面。全ての隊員から信頼される。〔此の人は諸事注意し、良人であることを明言してもよい〕と野村船長は述べています。

白瀬隊長がシドニーから一足先に帰国したため、隊長代理を務め、明治45年(1912)6月20日東京芝浦港に無事帰還しました。

探検後「花王石鹸」に入社し、工場長となりました。東京都荏原区小山町に「ペンギン堂薬局」を開設しました。



◀写真「開南丸船内衛生薬品室」

白瀬轟が新座市に住んでいた時に、お世話になった高橋家に寄贈した写真の中に唯一遺っている薬品室の写真。右側のメモ書きは白瀬の筆跡。三井所の出身大学である東京薬科大学が調べたところ、棚の上から2段目は①グリセリン、②コバイバルサム、③茴香(ういきょう)、3段目は④乾燥硫酸ナトリウム、⑤硫酸ナトリウム、⑥次硝酸ビスマス、⑦ヨウ化カリウム、⑧炭酸ナトリウム、⑨硫酸キニーネ、⑩下痢剤ということがわかった。

埼玉県新座市・高橋昭夫氏提供



04 書記長 多田 恵一

Tada Keiichi

探検時28歳
岡山県御津郡江与味村
明治17年(1884)生
昭和34年(1959)没



日露戦争に騎兵として従軍。生還した後、その拾った命を何か痛快な事業に投じて、国利民福に尽くしたいと考えました。

大隈重信伯爵と親交があり、明治43年6月に白瀬轟と最初に面会し、同年7月18日一番早く採用されました。〔南極探検日記〕、〔南極探検実録〕を著わす。航海中、船内誌「南潮」を発行し、多田が作詞した『南極探検隊隊歌』もあります。

愛猫家で開南丸の船内で猫名「タマ」を飼っていましたが、船内で事故死しました。

開南丸船上では、得意の尺八を奏し、詩吟を謡い将棋は隊員中一番強かったようです。

探検後は、東京第二公園にあった芝区青年会館に「開南探検協会」事務所を設置しました。



▲多田恵一の著作物

左から『南極探検私録』、『南極探検日記』、『傷痕』、『南極探検実録』。『南極探検私録』は明治45年(1912)7月30日に発行され、白瀬南極探検の数ある報告の中で一番早かった。

白瀬南極探検隊記念館蔵



05 糧食係 西川 源蔵

Nishikawa Genzo

探検時24歳
鳥取県気高郡鹿野町
(現・鳥取市)
明治20年(1887)生
大正14年(1925)没

西川増蔵・つなの二男として生まれ、早稲田大学在学中の明治43年8月9日、探検隊に採用されました。南極では氷岸に上陸用の足場を作るなどの作業に従事し白瀬隊長のホエール湾から突進隊を送った後、同湾からさらに東のエドワード七世ランド方面の沿岸探検を賄長・渡辺近三郎と探検しました。アレキサンドラ山脈の八合目まで達し、「大日本南極探検隊沿岸隊上陸記念標」(木製)を建て、その時の写真が遺っています。西川源蔵と渡辺近三郎の二人の帰船が遅いために、一時捜索隊を組織する騒ぎもありました。探検後は鳥取県内で講演会を開いたり、中央で舞台協会のマネージャーを務めましたが、大正14年7月16日38歳の若さで病死しました。



▲西川源蔵隊員の鋏(はさみ)
西川源蔵のご子孫から寄贈された愛用の鋏。
寄贈:小汲志南子(西川源蔵長女)



06 被服係 吉野 義忠

Yoshino Yoshitada

探検時23歳
香川県丸亀市
明治22年(1889)生
昭和33年(1958)没

香川県から北海道の増毛町に移り住んだ開拓移民でした。当時早稲田大学の学生であり、海外留学を希望する苦学生への救済などで有名な「力行会」の会員でもあったため、探検隊に応募。明治43年8月5日に採用されました。

吉野は被服係を担当し、第2次航海時には、船内でのコックも兼任しました。(武田輝太郎の日記)南極に突進隊とともに上陸。ホエール湾根拠地、南緯78度33分、西経164度22分にテントを張り、村松進隊員と突進隊が帰還するまで気象観測を行いました。

探検後、南極探検はロックフェラー財団からも援助を受けていたため、報告のために(大隈の依頼か?)大正2年(1913)米国・ロサンゼルスに渡りました。同年帰国した吉野は同じ増毛に住む花子(昭和46年70歳で死去)と結婚。晩年は故郷の丸亀で亡くなりました。享年71歳。



▲写真「『シドニー』営舎近傍の吉野隊員」
福岡県・三井所和幸氏提供写真データ



07 炊事係 三浦 幸太郎

Miura Kotaro

探検時25歳
宮城県
明治19年(1886)生
昭和42年(1967)没

明治43年(1910)7月5日に東京神田錦輝館で白瀬隊の南極行きの発表会があり、南極に行きたいと近所に住む親しかった麻布第一連隊長西郷虎太郎からの紹介状を得て白瀬中尉と会ったといいます。東大で身体検査と梅干しの種を砕くという試験があり、明治43年9月3日に採用され、コックを命ぜられました。出航前に南極探検隊の事務所の芝浦「月見亭」で血判をとり、白瀬隊長から刃渡り9寸の短刀を渡され小指の先を切って、親指に血をつけて押したといいます。

浄蓮寺資料の「命令録第二」には、シドニー滞在中の明治44年(1911)5月23日から、隊員たちの食事をつくるコックを専任で命じられていますが、第1次探検時に脳充血をおこし病後の衰弱が復さず、同年9月2日に出航する日本郵船・熊野丸でシドニーから帰国しました。

昭和21年(1946)頃、マッカーサー元帥に南極領土について白瀬中尉と一緒に会見しました。日本の南極領土は侵略してとったものでなく、学術的なもので戦争に関係ないという旨を述べると元帥は「了解した」というので「口頭でなく、書面にてお答えいただきたい」というと「OK」といわれたとのこと。その書面は白瀬隊長の手元にあると思うとインタビューに答えています。享年80歳。





08 橇犬係
山辺 安之助

Yamanobe Yasunosuke
アイヌ名：ヤヨマネクフ

探検時44歳
樺太
慶応3年(1867)生
大正2年(1913)没

樺太の^{やまんべつ}弥満別に生まれ、黒田清隆樺太庁長官に随行した経歴があります。明治8年(1875)、樺太千島交換条約により、北海道対雁(現・江別市)に移住。

明治26年(1893)樺太に帰島し、佐々木漁場(「丁」：かくちょう)で働きました。

明治43年9月、白瀬南極探検隊の話を知り、アイヌを見直してもらいたいという一心から探検隊に参加しました。性質温厚にして、真摯な人柄は信頼も厚かったとのこと。

金田一博士は山辺のことを「真摯熱烈の人」と呼び、探検後に博士と『あいぬ物語』を編纂。アイヌの奮起と差別と貧困から救うため、学校を建設するなど、アイヌの地位向上に身を挺して実践しました。



▲金田一京助編・山辺安之助著
『あいぬ物語』

大正2年(1913)11月1日発行

白瀬南極探検隊記念館蔵



09 橇犬係
花守 信吉

Hanamori Shinkichi
アイヌ名：シシラトカ

探検時33歳
樺太(現・サハリン州)
明治7年(1874)生
昭和と25~30年に没

樺太^{たらいか}多来加総代の末裔として生まれ、代々総代の家系で探検後も総代となっています。アイヌの言語学者知里^{ちりましほ}貞志保博士に、多来加の説話を口述。日本名は日露戦争後に大谷本願寺法主が樺太出張に随行した際にいただいたといひます。

^{しすか}敷香支庁長の勧めもあって、樺太犬10頭を引き連れ探検隊に参加。天性無邪気で、白瀬の著書「南極探検」には山辺安之助と共に、性質温厚にして従順素朴にいたっては密かに学ぶところがあったと記されています。航海中、海水を汲み上げ風呂の準備をするのは花守の役目でした。南極に上陸した明治45年1月16日、クレバスに落下、土屋運転士に救われています。

突進隊の一員として、山辺とともに橇犬の馭者として、犬の世話、隊員の食事をつくりました。

南極探検から帰国した花守は、大隈伯爵夫人に新聞紙に包んだ光沢のある南極鷹の羽を贈りました。夫人は花守の心遣いに感心し、良い記念になると礼を述べたといひます。



▲写真「シドニー営舎にて橇係アイヌ花守信吉」

写真の注釈には、身長五尺四寸(約164cm)と記してある。腰からアイヌ文様の道具をぶら下げているようだが、詳細は不明である。

福岡県・三井所和幸氏提供写真データ



10 学術部員
池田 政吉

Ikeda Masakichi

探検時44歳
東京市牛込区赤城下町(現・新宿区)
慶応元年(1865)生
大正8年(1919)没

東京市牛込区に生まれ、札幌農学校農業科(現・北海道大学農学部)卒業。

明治44年11月19日、シドニーを出発する第2次航海から学術部員として参加しました。探検後、池田は明治45年8月から大正3年11月にかけて、イギリスの王立地理学会に、日本の南極探検隊が調査を行った報告と白瀬隊が作成した地図を送ったことがイギリスに遺っている資料から判明しました。

「南極」到着時の隊員編成

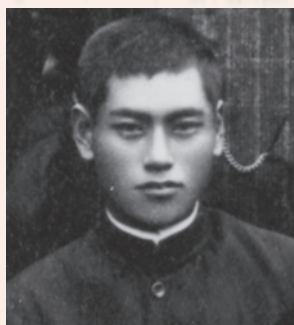
突進隊	沿岸隊
・隊長 白瀬 臺	・支隊長 池田 政吉
・学術部長 武田 輝太郎	・活動写真技師 田泉 保直
・衛生部長兼写真部長 三井所 清造	・隊員 吉野 義忠
・犬橇係 山辺 安之助	・隊員 西川 源蔵
・犬橇係 花守 信吉	・隊員 村松 進
・橇犬 30頭	・隊員兼活動写真助手 渡辺 近三郎
	・隊員 多田 恵一

観測隊

・隊長 吉野 義忠 村松 進

※「明治44年12月11日付け命令第83号五、隊員編成」『命令録第二』を図にした。ただし、吉野と村松は、突進隊が出発する「根拠地」に気象観測等を従事する「観測隊」となっているが、『命令録』には記録がない。





11 写真部員 田泉 保直

Taizumi Yasunao

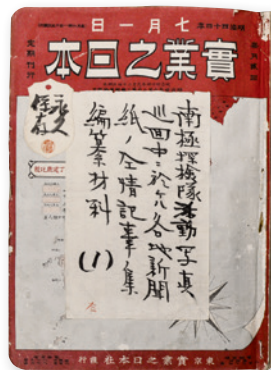
探検時23歳
東京市京橋八官町
(現・中央区)
明治21年(1888)生
昭和35年(1960)没



開南丸出発時の活動写真は「廣目屋^{ひろめや}」という会社が撮影しました(多田恵一『南極探検日記』)。探検隊員が活動写真を撮影することは、シドニーに向かう船内で検討されました(武田輝太郎の日記)。シドニーから戻った多田恵一が白瀬の手紙を持参し、導入を後援会に要望、大隈と親交のあった映画会社M・パテー商会社長梅屋庄吉に技師派遣を依頼しました。梅屋は技師男沢肅を指名しましたが、男沢は断り、助手の田泉に依頼しました。「映像の映りには文句を言わない。ただ機械を回していればいい」、「月給は80円やる(当時の月給は4円50銭)。1万円の保険をつけ、不幸があった場合は5千円を機械の損料として会社で取り、残額5千円は遺族にやるから行け、行かなければクビだ」と脅かされ承諾しました。

明治44年(1911)9月中旬に日本郵船「熊野丸」で横浜港を出航、10月中旬シドニーに着き、開南丸で南極に向かいました。南極では沿岸隊としてエドワード7世ランドを回って1週間位で鯨湾の上陸地点に帰りました。明治45年2月4日に南極鯨湾を出帆し、3月23日ウエリントンに寄港。日本郵船「日光丸」で日本に帰国しました。撮影機は英国製撮影機ワーウィック(40キロ前後)、レンズはツアイス(ドイツの有名レンズメーカー)F3.5というものでした。

田泉の撮影した活動写真は青山御所で皇太子(大正天皇)、皇太子妃などの前で上映され、明治45年の浅草国技館での上映を皮切りに全国で上映されました。白瀬も後年借財返済のためにこの映画をもって全国を講演して回りました。



▲南極探検隊活動写真巡回中の新聞スクラップ

この資料は雑誌『実業之日本』の中に当時の新聞記事が貼られたスクラップ集である。表紙には白瀬の直筆で「南極探検隊活動写真巡回中に於ける各地新聞紙の同情記事の集編纂材料(1)」と書かれている。日本国内や朝鮮、台湾などで南極探検隊の活動写真などが公演され、新聞に掲載した記事がびっしり貼られている。

浄蓮寺寄贈資料

南極探検の船員について

野村直吉は南極探検の計画を知ると「自分は給料など望まぬ、探検船の船長たる名誉をまっとうすれば足れり」と述べ、日記には南極探検を成功させ、日本の船舶と航海者の技術の高さを世界各国にアピールする意図があったことを記しています。

東京市役所が昭和11年に発行した『東京港を中心とする海上生活者調査』(東京市役所編)によると、船員は「甲板部」、「機関部」、「事務部」に分かれ、甲板部には船長と一等から三等までの運転士、水夫長、大工、舵夫、水夫が属しています。機関部は、機関長、機関士、油差、火夫が属し、事務部は事務長、無電技師、賄長、料理人、給仕などが属します。給与の金額も各

部でこの順番になっており、船長と機関長、水夫長と火夫長、大工と油差が同じぐらいの金額になっています。

航海に関する資格は、船長、一等から三等までの運転士、機関長、機関士までが資格が必要で、商船学校の卒業あるいは逓信省の海技免許が必要でした。水夫長や舵夫、水夫、火夫は資格が不要でしたが、水夫見習いから始まり、経験によって昇格していきました。

「開南丸」は基本的に帆走で、南極に近づいた時、海に浮かぶ氷を避けるため「縫航」などをする際、補助機関を使用しており、船員にそのまま当てはめることはできませんが、およそ船員の関係性が理解できると思います。

また、探検隊員との関係性についても、機関士だった村松進が途中で隊長秘書となるなど、隊員の業務を兼務する場合もあったことから、隊員と船員の業務に関する研究は今後の課題です。

「東京芝浦港から出航する木造機帆船・開南丸」▶

開南丸は明治43年11月28日に出航しようとしたが、直前まで船内を一般の人々に見学させていた。見学終了後に荷物を積み込んで出航するのに間に合わなかったため、翌29日に出航した。



静岡県浜松市・村上正俊氏蔵

「南極探検の船員」組織イメージ

甲板部

船長・一等運転士・二等運転士
三等運転士・水夫長・大工・舵夫
水夫

機関部

機関長・機関士
油差・火夫

事務部

事務長・料理人

[船員]



01 船長
野村 直吉

Nomura Naokichi

探検時44歳
石川県羽咋郡一の宮
(現・羽咋市)
慶応3年(1867)生
昭和8年(1933)没

本名、西東直吉。西東勘右工門・きよ夫婦の二男に生まれ、独学で甲種船長免許をとり、神戸市の国際汽船会社の「ヨーロッパ丸」の船長として欧州航路に就航したといひます。

野村船長の操る木造機帆船「開南丸」(204トン)は、東京芝浦港を出港し、明治44年3月14日南極ロス海コールマン島沖(南緯74度16分、東経172度7分)まで到達しましたが氷海に前進を阻まれ、オーストラリアのシドニーに引き返しました(第1次航海)。白瀬隊がシドニーで南極の夏を待つ間、野村は再征資金や船具を確保するために一時日本に帰国し、10月18日豪州航路の熊野丸でシドニーに帰着。翌11月19日に再挑戦のため出帆(第2次航海)。明治45年1月16日予定地ロス海ホエール湾に到着しました。南極突進隊を待つ間、「開南丸」は野村の指揮のもとに沿岸などで学術調査を行い、西経151度20分、南緯76度6分まで東進しました。これは当時の新記録となりました。突進隊が帰還したのち、2月4日ホエール湾を出航し明治45年6月20日、1人の犠牲者を出すことなく東京・芝浦に帰還しました。出帆以来1年7か月の長旅でした。

探検後は遠洋航路、欧州航路、米国航路などの大型汽船の船長として活躍し、晩年は築港関係の仕事にもかわり、昭和8年10月17日東京足立区千住において逝去しました。享年66歳。



▲野村直吉筆
石川県羽咋市歴史民俗資料館蔵



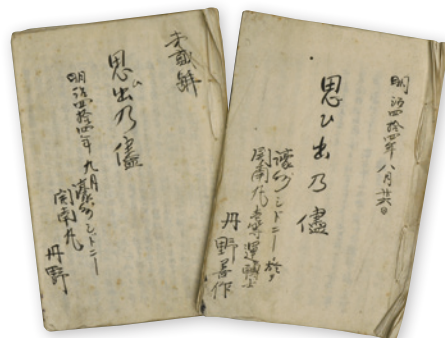
02 一等運転士
丹野 善作

Tanno Zensaku

探検時41歳
宮城県渡波町
(現・石巻市)
明治4年(1871)生
昭和18年(1943)没

船員の中では、一番最後に採用が決まりました。野村船長を補佐し、副船長に近い立場にあったと推測されます。シドニー滞在中に、日記「思ひ出乃儘」を記しています。探検後は、民間船舶の船長などを務め、71歳の時に佐賀県唐津港で仕事中に倒れ死去しました。

第1次航海での撤退後、隊員たちからは様々な葛藤と不平不満が噴出しました。多田恵一の著書「南極探検私録」の中で「野村直吉船長と丹野一等運転士の専横的行動について、われわれ隊員として黙過できないことが起きた。それはシドニー到着の際だった。…(中略)ついに両氏の排斥問題が持ち上がったのである。」と記されています。開南丸のシドニー入港後、野村船長と多田の二人が日本郵船で一時帰国した際、問題の解決を南極探検後援会の幹事会議にまで持ち込んでいます。この事態に対して大隈重信伯は、白瀬の報告書を見、多田の報告を聞いたうえで、「いま排斥などの処置をなすべき時ではない。内紛は断然止めなくてはならぬ。」と説諭し、野村と丹野は留任と決定しました。丹野は結局シドニーで下船しましたが、第2次航海への不参加については明らかにされていません。



▲丹野善作筆思ひ出之儘(第一号・第二号)
丹野収氏寄託資料





03 機関長 清水 光太郎

Shimizu Kotaro

探検時40歳
愛知県碧海郡棚尾村
(現・碧南市)
明治8年(1875)生
昭和20年(1945)没

清水家の長男として生まれました。棚尾村は古くは遠浅の海で砂浜が広がり、東は海で入江を形成する、海に囲まれて育った幸太郎は、明治41年独学で一等機関士免状を取得し、品川高等海員養成所長の紹介により探検隊に加入しました。

白瀬南極探検隊では機関長として活躍し、隊員の中で相撲が一番強かったといわれています。

探検後は、幸海丸の機関長や、港湾の仕事を経て昭和20年8月8日70歳で死去しました。



04 二等運転士(のち一等) 土屋 友治

Tsuchiya Tomoji

探検時34歳
山形県西田川郡賀茂村
(現・鶴岡市)
明治11年(1878)生
昭和6年(1931)没

漁業を営む土屋鶴吉(屋号與助)の三人兄弟の末っ子として生まれました。当時の加茂は天然の港湾として汽船が停泊、日本郵船の西回り航路の寄港地にもなっていました。土屋は丸木舟で単身加茂港から約40キロ離れた飛島へ渡ろうと試みたこともありました。

水夫時代から苦学勉強して海技資格の取得に励み、甲種二等運転士となり、東洋汽船の四等運転士としてサンフランシスコ航路「アメリカ丸」の機関士となりました。明治41年(1908)7月、小樽木材会社所属の「第二小樽丸」に運転士として乗り組み、船長矢嶋栄太郎は日露戦争当時、野村直吉と御用船に乗り組んだ間柄だったことから、矢嶋や野村の推薦で南極探検隊に採用されました。「開南丸」では副船長格として野村船長を補佐し、安全航海の陰の大きな支えとなりました。友治は20代の頃に日本郵船の「熊野丸」や「八幡丸」でオーストラリアやマニラ方面の南半球を航海した経験があり、白瀬隊長にとっては心強い存在でした。

探検後は東和汽船、東洋汽船などに入社、サンフランシスコ航路の「明洋丸」に乗り込みました。昭和2年(1927)4月から横浜の海事協会に入り高等船員係として勤務。昭和6年(1931)1月18日に脳溢血で倒れ、翌19日午前3時ごろに自宅で死去しました。享年52歳。

面倒見のよい人で、酒をこよなく愛したほか、追分節をよく歌い、倒れた時も追分節を歌っていた時のことだったといわれています。



▲土屋友治胸像の原型

友治の遺徳をしのぶ郷里の有志が昭和34年(1959)11月3日、その胸像(鶴岡市高島町、平田鎌吉制作)を加茂公民館正面玄関に建立、除幕(その後、山形県立加茂水産高校の前庭に移転)。台座には第1次南極観測隊長永田武筆による「白瀬南極探検隊員土屋友治君之像」の文字がある。

秋野登志氏寄贈



05 三等運転士(のち二等) 酒井 兵太郎

Sakai Heitaro

探検時44歳
愛知県
明治2年(1869)生
昭和12年(1937)没

酒井権左衛門、妻りよの三人兄弟の長男として生まれました。どのような経緯で探検隊に加入したのかはわかりませんが、三等運転士として参加しました。野村船長の日記によると、明治45年1月18日午前9時30分、陸上隊員は起き、揃って食事を始めました。彼らの食事中に船員らは、昨日下ろした沿岸隊用の荷物を本船に積入れました。というのは、荷物を置いた氷盤が割れて流れ出しそうになっていたのです。二等運転士の酒井と水夫1名が手際よく取り込みました。

1月24日、午前0時30分酒井運転士以下5人の水夫がペンギン鳥捕獲のため上陸しました。



▲明治45年1月24日野村船長の日記(複製資料)酒井運転士以下5人ペンギン鳥捕獲のため上陸する場面を描いた水彩画。

白瀬南極探検隊記念館蔵





06 事務長
島 義武

Shima Yoshitake

探検時30歳
福島県宇多郡立谷村
(現・相馬市)
明治14年(1881)生
昭和37年(1962)没

幼名伏見清五郎。明治30年4月8日、遠縁にあたる相馬郡松ヶ村の島家に入籍。明治33年7月、日比谷中学校卒業。大正5年6月、神職教習科卒業(皇典講究所)。縁あって、大隈伯爵の書生となり、早稲田大学や国学院で学びました。

探検隊に参加した動機として、次のように述べています。「南極探検によって前人未発の智聞を世界に伝えることは、至極危険なことではあるが、男子として雄壮にして豪快な事業といわねばならぬ」

事務長だったため、シドニーでは、ドックに入っている開南丸船内に宿泊しました。

帰国後、「南極探検と皇大神宮の奉斎」を著しました。昭和33年(戌年)当時土師田八幡宮宮司であった島は、「南極皇化忠犬慰霊碑」建立を発起しましたが実現しませんでした。



▲島義武著『南極探検と皇大神宮の奉斎』昭和5年(1930)9月30日発行思想善導図書刊行会発行

白瀬南極探検隊記念館蔵



07 木工
安田 伊三郎

Yasuda Isaburo

探検時32歳
静岡県
明治11年(1878)生
没年不明

安田については、親族調査でも資料がなく、情報探索している状況です。安田は大工として探検隊に参加しました。航海中の船内で、隊員たちの要望を受け、大工仕事をしています。

明治44年12月25日の項では、「船にては餅突の準備するためセイロや米漬やらに忙殺されている」、「5時、大工安田、自分(武田)の寝台への添板を作ってくれた。これローリングの際、正に落しとすること度々なればなり。午後11時より餅搗きへ着手した。臼は醤油樽へキャンパスを張り、杵は(シドニーでのテントの)キャンプの柱にてセエロは全板にて安田大工が作った。セエロの簾は旗竿にて作り、何不自由なく餅搗きを始めた。隊船員一同大賑にて午前4時半までに搗き終わった。搗高約一俵とのこと。」(武田輝太郎の日記)

大工仕事だけではなく、南極に到着しても荷物の上げ下ろしや上陸の手伝いなど隊員・船員の活動に柔軟な対応をしていることがわかっています。



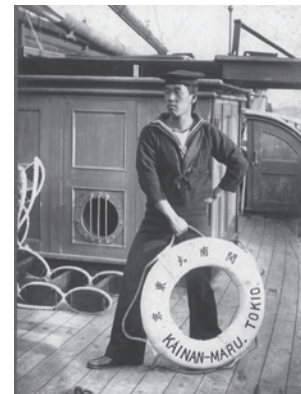
08 油差
笹崎(藤平) 量平

Sasazaki (Fujihira) Ryohei

探検時27歳
千葉県安房郡豊津村
(現・館山市)
明治16年(1883)生
昭和28年(1953)没

どのような経緯で探検隊に加入したのかはわかりませんが、藤平は油差として参加しました。

明治45年6月18日16時、開南丸は千葉県館山湾柏崎の浜、鷹の島の東十余町に投錨を完了しました。同船を迎えるべく、すでに数隻の小舟が島の沖に出て待機していました。船長以下乗組員はみな元気で、「何よりも先ず新聞を見たい」という者、「早く茶漬を食べたい」と笑顔をこぼす者と色々でした。連れ帰った6頭の犬も檻から出され、甲板上を走り廻っていました。検疫の都合で、船長と同地豊津村出身の機関士藤平量平の2人が船を代表して上陸し、歓迎会に臨みます。館山公園には万国旗が掲げられ、昼夜花火を打ち上げての大歓迎でした。(野村船長の日記) 藤平は義太夫を得意とし、帰国後に、笹崎家の養子となりました。



▲写真「シドニー滞在中開南丸上藤平機関士」

福岡県・三井所和幸氏提供写真データ





09 機関士 村松 進

Muramatsu Susumu

探検時26歳
山梨県市川大門村
(現・市川三郷町)
明治18年(1885)生
昭和2年(1927)没

甲斐源氏の流れを汲む代々医家を営む村松家の村松 覺雄・なかの三男として生まれ、県立甲府中学校を卒業後、明治39年海軍を志願し横須賀海兵団に入りました。明治43年、探検隊員の選抜は東京帝国大学内科医室で医学博士3人による身体検査と面接が行われました。医師の中に村松の兄・学佑がいたことから、村松進が探検隊の参加に関係があったと考えられています。当初は機関士として採用されましたが、第2次航海からは隊長秘書となりました。

南極に到達した白瀬隊はホエール湾に根拠地を設営しましたが、村松進は吉野義忠隊員と突進隊が帰還するまで、根拠地で気象観測に当たりました。

探検後は南洋興業株式会社に入り、マーシャル諸島ジャルート島支店の主任となりました。辞した後、東京で実業に従事していましたが、大正15年病に罹り昭和2年6月14日東京で死去しました。

村松進は、出航に際しその心境を漢詩に託して血判を押し、遺品として姉に預けています。



▲甲斐国医史刊行会2002年発行 村松学佑著

『甲斐国医史』

村松進の兄・学佑が中世から近代までの甲斐国に遺る医学資料を収集し、出版する予定だったが、志半ばで死去。様々な方々によってようやく、2002年に刊行することができた大著である。

白瀬南極探検隊記念館蔵



10 水夫長 井上(高川)歳次郎

Inoue (Takagawa) Saijiro

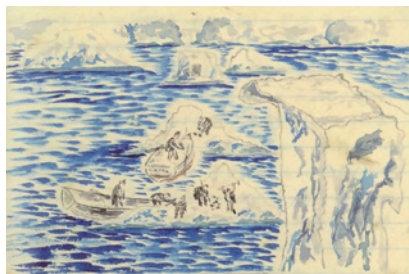
探検時31歳
三重県
明治14年(1881)生
昭和12年(1937)没

明治43年10月14日佐藤市松とともに探検隊に採用されました。

開南丸のマストに取り付けた樽の見張り台で、昼夜を問わず航行の安全に務めました。

南極からの航行時には、ペンギンのはく製や、雪鳥を剥製にしてくれたと武田輝太郎の日記、明治45年1月2日の項に記述があります。釣りを得意とし、航海中マグロなども釣りあげています。

明治45年1月30日、開南丸停船後、小端艇及びペーカ艇の2隻を下し、探検と石片採集に再度着手しました。2隻の艇員は酒井兵太郎二等運転士と渡辺鬼太郎、柴田兼治郎の2人の水夫。池田政吉、西川源蔵の2隊員のほか水夫長の高川才次郎も同乗し、2艇ともに11時頃帰船しましたが、風潮のせいか昨日多数あった氷塊は氷堤に張り付き、到底行くことが困難で、20個ほど採集しました。その中の大石は、約20貫目余もあり、石質は昨日と同種の黒白点々の堅き御影石でした。(野村船長の日記) 帰国後に井上家の養子となりました。



▲明治45年1月30日野村船長の日記
(複製資料)

高川水夫長を含む船員5名と隊員2名が、海に浮かぶ氷の塊に張り付く鉞石を採取している場面を描いた水彩画。

白瀬南極探検隊記念館蔵



11 船取 佐藤 市松

Sato Ichimatsu

探検時33歳
福島県
明治10年(1877)生
昭和34年(1959)没

日露戦争時、海軍三等兵曹として活躍しました。軍艦「八重山」に乗艦し北海道根室湾で沈没した経験もあります。

船長の野村直吉と知り合いで、明治43年10月14日高川才次郎とともに探検隊に採用されました。南極では氷が一面に張りつめ船が氷圧できしみ、もうダメだと何回も思ったと述べています。病気のため、再び極地に向かうことが不可とされ、シドニーより帰国し、探検後は船員生活を50年余り続け、昭和34年3月19日、81歳で生涯を閉じました。





12 舵取 渡辺 鬼太郎

Watanabe Onitaro

探検時29歳
愛媛県
明治16年(1883)生
没年不明



13 舵取 釜田 儀作

Kamada Gisaku

探検時27歳
石川県
明治16年(1883)生
没年不明



14 火夫 杉崎 六五郎

Sugisaki Rokugoro

探検時36歳
神奈川県
明治7年(1874)生
昭和4年(1929)没

渡辺は舵取として探検隊に参加しました。お国自慢の伊予節が得意。滑稽で皆を笑わせました。マレーシアに移民したとのことですが、詳細は不明です。

「明治45年1月5日、午後2時まで海豹の片付でごたつき、間もなく小氷山にペンギン鳥数羽乗って流れて来た。ただちに小舟を降ろし、渡辺近三郎、花守信吉、西川源蔵、渡辺鬼太郎の4名にて氷山に乗付けた。4羽捕えたが、1羽逃げられたため、氷上を逃げ捕まえる姿がすこぶる「滑稽」だった。そのペンギンを移した後、船の反対側にある氷盤上にまた数羽発見し、再び船を廻してまた4羽捕らえた。記念に撮影した後、プラン酒を飲んだ。」とあります。(武田輝太郎の日記)

「明治45年1月16日11時入江に到達し、氷堤の一部は坂になって上陸できそうなので、本船(開南丸)を停船しました。小端艇を降ろし、土屋運転士には内陸に探検ができる確実な場所かどうか調査するよう命じ、渡辺鬼太郎も同行させます。白瀬の命により、武田輝太郎と花守信吉の2人も同行しました。本船は周囲恐るべき高い氷の港に、上陸者を監視しながら操縦しました。4人共に氷の坂を登り始め、歩行順はアイヌ花守、土屋運転士、渡辺鬼太郎水夫、最後は武田でした。帰った土屋の報告によると、氷河の様で上陸地には適しなかったため、フラム号が停泊する湾に移動しました。」(野村船長の日記)



▲明治45年1月16日野村船長の日記
(複製資料)

午前11時氷河の入江に到着し、ここから内陸に向かうことができるか、調査した場面を描いた。
白瀬南極探検隊記念館蔵

釜田は舵取として探検隊に参加していますが、情報が不足しており、あまりわかっていません。

明治45年1月19日、氷堤の近くに本船の蒸気力を利用して荷物運搬用の新しい道を作る関係上、離しては寄り、寄っては離すという、手間のかかる接氷・離氷の危険な作業を繰り返しました。午前1時30分、上陸可能な道が完成します。水夫の柴田兼次郎と村松進の両人が帰船し、同時刻頃、上陸隊員は食事を終え端艇を降ろす準備を始めました。

10分後に水夫長高川才次郎、柴田兼次郎、舵取釜田儀作の三人が手伝う小端艇に乗り、三井所、武田、村松が上陸して行きました。(野村船長の日記)



▲明治45年1月19日野村船長の日記
(複製資料)

海面の氷が流れているため、開南丸は直接着岸できず、小端艇を使って荷物の積み下ろしをしている。高さ約60mの氷の断崖を登り、内陸に突進する根拠地にテントを立てた場面。
白瀬南極探検隊記念館蔵

杉崎は火夫として参加していますが、情報が不足しており、あまりわかっていません。

明治45年1月24日午前0時、風のため繫留する氷を船で破壊してしまうため、繫留地を転じる必要があることから、船の操縦人員を残さなければならず、土屋運転士と協議の上、探索船員を決めました。本船と探索隊との信号を定め、渡辺、柴田、杉崎の3名と監督として島事務長に命じ、多田隊員も加わる事になり、5名で上陸することが決まりました。午後1時30分、杉崎火夫は別れて昨日上陸した第2沿岸隊が残した、活動写真機の附属品を積載した橇1台を引き帰船します。杉崎火夫に聞くと、4名の探索員は山の方西に向けて行ったとのことでした。(野村船長の日記)探検後は漁船や紡績会社で働き、昭和4年に死去しました。





15 火夫 高取 寿美松

Takatori Sumimatsu

探検時35歳
東京都
明治8年(1875)生
没年不明

高取については、親族調査でも資料がなく、情報探索している状況です。高取は火夫として参加していますが、情報が不足しており、あまりわかりません。

活動写真の導入は、日本から南極へ出発する当初から言われていましたが、明治44年3月20日、南極の氷に阻まれ、シドニーに向かう船中に、白瀬と高取が活動写真のことを打ち合わせていました。(武田輝太郎の日記)

同年4月20日には、頭髪が伸びたため、武田輝太郎は、山辺安之助に風呂を沸かせ、高取寿美松火夫に依頼して散髪してもらっています。心臓の持病があって第1次航海後に帰国しました。(武田輝太郎の日記)



16 料理人 渡辺 近三郎

Watanabe Chikasaburo

探検時29歳
岐阜県
明治14年(1881)生
昭和37年(1962)没

日米航路の「日本丸」の船員であった渡辺近三郎は、白瀬南極探検隊に応募し、食事担当として隊員に加わりました。ロス海ホエール湾で白瀬隊長の5人の突進隊と別れ、東航した開南丸の沿岸探検隊としてエドワード七世ランドを望むビスコー湾から内陸16キロまで渡辺は西川源蔵とともに入りました。アレキサンドラ山脈の山すそに「大日本南極探検隊沿岸隊上陸記念標」(木製)を建てるとともに一帯を写真撮影しました。

船長としての記事が「婦人世界・第7巻第13号(大正元年11月1日)氷塊で飯を炊く一南極探検の料理日記」に詳細に掲載されています。「明治45年の正月元旦に船上で餅をつき雑煮をつくったところ、高波で鍋をひっくり返してしまいました。アザラシやペンギンを捕らえて食糧にしました。アザラシの肉は3回も水にして血抜きしてから味噌煮と照焼にして食べ、油は燃料に使いました。南極で食べたものは一度もおいしいと思いませんでした。日本に帰って何よりもおいしかったのは菜っ葉の香の物と野菜物でありました。殊に小笠原島で久しぶりに茄子の糠味噌漬けを食べた時は何ともいわれませんでした……。」

探検後は満州にわたりコック生活を続け、昭和37年2月12日埼玉県浦和市で肝臓ガンのため死去しました。



▲雑誌『婦人世界第7巻10号、11号、13号』3冊
大正元年、婦人雑誌に南極で食べたものや料理について紹介した記事が3回にわたり、特集記事になった。

記事にはシドニー滞在中、日本茶に砂糖と牛乳を入れて外国人に出したところ評判がよかったことや、「炒り鳥にして皆一切れ」食べ、「チョイと鴨の味に似ている「珍しいアホウドリの味わい」など、当時の婦人が好みそうな料理に関する記事が特集された。

白瀬南極探検隊記念館蔵



17 水夫 柴田 兼治郎

Shibata Kanejiro

探検時20歳
愛知県
明治23年(1890)生
昭和13年(1938)没

柴田は水夫として参加していますが、情報が不足し、あまりわかりません。

第二次探検隊では嵐の中、傾斜35度以上に揺れる開南丸のマストの頂上に上り、トップマストの縛着作業に従事した記録や、花守隊員が射撃した大海豹の捕獲を試み、凍てつく南氷洋に裸で飛び込むなど、隊員・船員の中でも勇敢気鋭で鳴らしたと南極記に5頁にわたって紹介されています。嵐の中大揺れに揺れるマストへ登って仕事をするのはいつも柴田水夫だったようです。

柴田は探検後、米国に密航し、帰国後鋼管会社で通訳をして昭和13年結核により死去しました。



▲写真「シドニー滞在中開南丸水夫柴田」

福岡県・三井所和幸氏提供写真データ





18 水夫
福島 吉治

Fukushima Kichiji

探検時19歳
千葉県
明治24年(1891)生
昭和18年(1943)没



19 見習運転士兼通訳
三宅 幸彦

Miyake Yukihiko

探検時27歳
和歌山県和歌山市
明治17年(1884)生
昭和40年(1965)没



20 火夫
浜崎 三男作

Hamasaki Miosaku

探検時27歳
大分県
明治16年(1883)生
没年不明

隊員・船員の中で最年少参加。エドワード七世ランドの探検において、西川・渡辺両隊員が一時行方不明と判断され捜索隊を出す騒ぎとなりましたが、両名が自力で戻る途中、濱崎船員とともに迎えに出て、饅頭を与え元気づけています。

明治44年12月24日の項では、25日のクリスマスは日付変更線上(航海)により、今日実施すると決め、かねて依頼を受けていたクリスマスの贈り物を船内第一番の年が若い者にその旨を伝えて贈ることにしました。

一番の青年は福島水夫と柴田水夫で、神様と贈り主の『パアスルバイノシヨド氏』へ感謝の礼拝し、武田の部屋で贈り物を渡しました。柴田水夫が贈り物を開き、各員に分与しました。(武田輝太郎の日記)



材木商の長男として生まれ、中学3年の時、父親と意見が合わず祖父に連れられアメリカへ渡り、ロサンゼルスの高校、アイオワの大学で学んだ後、ノルウェー帆船の水夫となってアルゼンチンに渡りました。後に、隣国ウルグアイから英国船で欧州へ行き、明治41年ニュージーランドの汽船会社で働きました。

明治44年2月8日白瀬探検隊の開南丸がウェリントンに寄港したので、オークランドにいた三宅は祖国からきた開南丸に「南極を枕に大和心を成し遂げよ」と祝電を打ちました。開南丸は南極に向かい、三宅は同年3月にシドニーに渡り、南極の地に上陸できず空しくシドニーに引き上げた白瀬隊に会いにいき「前に祝電を打った者です」と隊長に面会、語学力を買われ通訳兼運転士として採用され、第2次航海から参加しました。「こんな小さな船に、通訳とは大げさだから、名目は運転士見習いということにしてくれ」と隊長から言われたといひます。

開南丸が鯨湾に入った時、「海賊船だ」と誰かが叫びましたが、三宅にはノルウェーの国旗を掲げていることから、アムンセン隊を迎えに来たフラム号であることがわかりました。野村船長と三宅は隊長の命を運び、通訳として船長ニールセン以下11名を訪問。後から開南丸を訪問した士官2名は「こんな船では我々は到底こまどころか、途中までも来ることはできぬ」と驚いていたといひます。

三宅は留学中、街頭で絵を描いて学費を稼ぐほどの腕前で、南極探検時には「荒れる海」「氷海」「南極の生物」など片っ端からスケッチし、帰国後、それを畳半分ほどの美濃紙にまとめました。初めは油でしたが、中川八郎画伯の忠告もあって墨絵に変えたといひます。



▲三宅幸彦筆「白瀬突進隊五人と根拠地観測隊二人を見送る開南丸」

明治45年1月19日の場面を三宅が描いた墨絵。

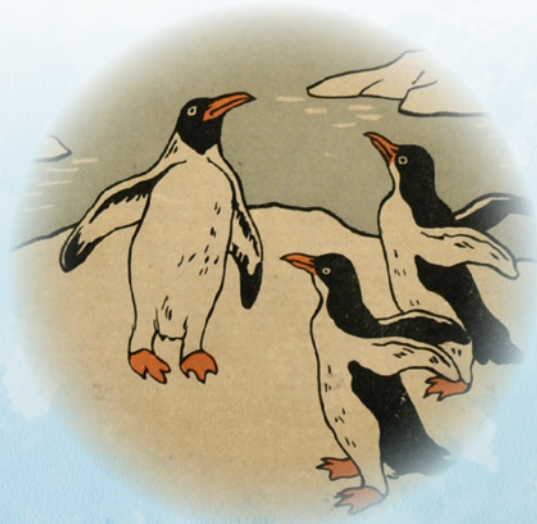
三宅数彦氏寄託資料

浜崎は火夫として探検隊に参加していますが、情報が不足しており、あまりわかっていません。

シドニー滞在中、丹野一等運転士外2名の船員(佐藤舵取・高取火夫)に下船の要求がありました。船長は要求に応じ、シドニーに在留していた三宅幸彦、浜崎三男作を替わりに乗船することにします。両名は喜び勇んで乗船を望みました。2人には長い海外経験があり、探検事業にかなりの興味を持つ人で、「西向き経歴」を有する人と評しています。(野村船長の日記)

明治45年2月4日午前4時、2艘の伝馬船に乗り込んだ隊員とは別に、本船(開南丸)には野村船長、三宅運転士見習兼画工、安田大工、清水機関長、藤平二等機関士、濱崎火夫が残り、荷物が届けば積込を行いました。本船には積入犬6頭。氷堤に残した犬は23頭でした。午前10時30分、陸上探検に用いた諸品積込みが終わり、急いで2艘とも、甲板へ捲き入れ、総員乗り組んで出帆しました。(野村船長の日記)





白瀬轟生誕160年・大和雪原到達110周年記念企画展

白瀬轟を支えた南極探検隊

NPO法人白瀬南極探検100周年記念会による企画展示

「南極に立った樺太アイヌとカラフト犬」

南極の内陸をめざした突進隊には、白瀬轟隊長、武田輝太郎学術部長、三井所清造衛生部長のほかには2人の樺太アイヌ隊員、山辺安之助（やまのべやすのすけ）と花守信吉（はなもりしんきち）がいました。寒さに強いカラフト犬を使う名手として参加した隊員です。

突進隊は明治45年（1912）1月28日に「大和雪原」に到達後、やむをえず犬隊員であるカラフト犬20頭を置き去りにした悲しい歴史がありました。

当展ではアイヌの誇り、そして奮起と地位向上を願い、日本人として初の南極探検にアイヌも参加した歴史をご紹介します。



白瀬南極探検隊記念館

〒018-0302 にかほ市黒川字岩瀧15-3

TEL 0184-38-3765

FAX 0184-38-3762

ホームページ：http://shirase-kinenkan.jp

Eメール：shirase@city.nikaho.lg.jp

開館時間 9:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 月曜日（祝日の場合はその翌日）

年末年始（12月29日～1月3日）

入館料 ●一般/300円 ●小中学生/200円

●団体（20人以上）一般/200円 小中学生/100円

●障がい者割引/無料 ※受付にて手帳等をご提示ください。



記念館HP

